源氏物語と唐代の伝奇小説

——夕顔・末摘花・六条御息所・浮舟物語と霍小玉伝——

郭　潔梅

一　影響関係の提起

「源氏物語」が「霍小玉伝」から影響を受けていると言い始めたのは江戸時代の斉藤正謙（一七九七—一八六五）であろう。斉藤は『拙堂文話』に

源氏物語其体本二南華寓言一、其説二閎情一、蓋従二漢武内伝・飛燕外伝及長恨歌・霍小玉伝諸篇一得来。（拙堂文話巻一）

と述べた。川口久雄氏は、唐代の伝奇小説と『源氏物語』の間になんらかの影響関係があるように思われると言い、また「霍小玉伝」と「源氏物語」の影響関係について

霍王は桐壺帝に、王の寵婢の浄持は桐壺更衣に、小玉は源氏に当たる。母が低い階級出身であること、姓をかえること、その子が才色兼備であることなど、桐壺巻と一脈の類似がある。小玉が李十郎にあって歓会をとげる条は、源氏と六条御息所との恋愛に、李十郎が小玉を訪れなくなって夕顔と結ばれる条に措定することができようか。かくて小玉は憤って死に、その亡霊が出現して、李生と新しい妻盧氏とを悩まし、ついに二人の結婚を破滅に導くのであるが、夕顔の巻に御息所の霊が出現して、夕顔の頓死する条を連想せしめる。(1)

と具体的に指摘された。この見解に対して中西進氏は、川口氏の丹念な指摘は「貴重な研究というべきであろう」が、しかし

「霍小玉伝」の全体を読むと両者の趣はかなり違っている、[2]と否定した。確かに、川口説には全面賛成しかねるものの、小玉が死んでから亡霊がまた出て来て「李生と新しい妻盧氏とを悩まし、ついに二人の結婚を破滅に導く」という新奇な創意は、六条御息所物語と一致している。そのほか「源氏物語」の数篇、夕顔巻・浮舟物語の怪異表現、末摘花及び浮舟の人物設定や人物像の造型などが「霍小玉伝」との類似から見れば、多くの示唆を得ながら語り進められて来たではなかろうかと考えている。

「霍小玉伝」は『太平広記』巻四八七（雑伝四）所収、『異聞集』など多数の小説集にも収められている。その作者の蔣防は字子微、義興（現河南省）人で、生没不詳、ほぼ唐憲宗、元和中前後に（八一三年頃）在世、官位は右拾遺より翰林学士に進んだが、後逐われて江州刺使に貶せられた。「霍小玉伝」の簡単な梗概は次のようである。

大歴年間、隴西人李益は二十歳で進士に及第し、若いのに詩才があって、美人を得たいと念願していたが、久しくその願いは適えられなかった。更に謝礼を多く出し、懇ろに周旋者に頼み、数か月経ってからついに小玉と知り合った。彼女は、故霍王にずいぶん可愛がられた末娘で、生れ付きの艶やかさ、品のよさ、物腰のしとやかさ、何一つ人に劣った点はなく、音楽、詩文も出来ないものは何一つない女性であった。

二人は睦まじく付き合って、日夜ともに二年間過ごしたが、李益は官僚採用試験に合格し、県主簿に任命されたため、小玉をおいたまま赴任した。帰省前、厳格な母親が既に李益の為に、名門出身の従妹の盧氏と結婚の口約束をしたので、李益は小玉との誓いを忘れて、音信を断って行方をくらました。小玉は心配と無念の為に、ついに病床につき、一年あまり過ぎて枕も上がらないほどであった。

翌年の春、ある日李益が仲間と崇敬寺へ牡丹の花見に行っているところに、急に黄衣の豪士が強引に李益を小玉宅に招き寄せた。小玉は、か弱い身体を支え、李益と顔を合わせると、何も言えなくなった。悲痛のあまり身を震わせて泣き、「我死之後、必為二厲鬼一、使二君妻妾、終日不一安」と言って左手を伸して李益のうでを握り、盃をなげうち、身を振るわせながら泣き、やがて息絶えた。李益はたいそう後悔し、喪服をつけて朝夕悲しげに泣き続けた。埋葬の前夜、亡くなった小玉の亡霊が再び現れて別れの挨拶に来た。その後小玉は遺言の通り、李益の妻・妾に頻りに祟り、李益の人生は「至二三娶一、率皆如レ初焉」、三回結婚しても、みな始めと同じく不幸な始末であった。

当時の社会風潮として、女性が死んでからも一途に男を待ち

つづけるのは普通になっているが、死んでから祟るのは珍しい。だからこそこの一篇は、新奇な創意の点において傑作と言われ、唐代小説の中で最も知名度の高い、まとまった長編的構想の悲恋小説である。

二　夕顔巻怪異性の表現と「霍小玉伝」

夕顔物語は物の怪の出没を主幹にした人目を引く巻である。池田亀鑑博士は、夕顔物語は「何らかの変形・変質をへてこの物語に生きており、後者にもまた何らかの先縦のモデルがあったに違いない」[3]と指摘し、また『河海抄』を始め、河原院の伝説や『今昔物語集』の説話と同じような素材を使っているなどと指摘したが、さらに、素材よりも夕顔の巻その「怪異性の表現として驚くべき秀作であるといわなければならない」[3]と強調した。

夕顔物語は、怪異の記述に止まらず、綿々たる男女の恋を語りながら物の怪の祟りを織り込み、個性のある人物像を作り上げた。その手法を見ると、夕顔の巻にある「変形・変質」したものは、『今昔物語集』と同次元の文学作品だとは考えられず、唐代の伝奇小説としか考えられない。先ず物の怪の正体を見てみよう。

1　物の怪の正体　深夜、美しい姿の女が枕元に坐って、嫉妬の言葉を発しながら夕顔を揺き起こそうとする。その美しい姿の女の正体について、従来六条の御息所の生霊説と、廃院に住み込んでいる物の怪説に分かれて論争されて来た。だが真夜中に出没した美女は、①「いとをかしげなる女」の姿をして、②「宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに」出没し、③「面影に見えてふと消え失せぬ」――と、以上三つの特徴を持っている。この三つの特徴を見ると、その物の怪は生霊ではなく死霊・鬼の特徴に適合する。中国では鬼といっても、日本人の頭にある「人間によく似てゐて、裸体で筋骨逞しく頭に角があり、股間には虎の皮の裨を着けてゐる。眼はギョロギョロと底まで光り、口は耳もとまで裂け、物凄い姿」[4]のイメージと縁遠く、人間そのままである。また鬼は陰に属し、常に夜に出没する。肉体を抜けたために重みがなくすうと出て来てすうと消える。特に若い美しい女の鬼は、たまたま小説の主人公になって立派な男に魅入って、恋愛し結婚まで要求する。夕顔巻に出没する物の怪が美しい女の姿をしていることこそ中国文学の影響だと考えられる。

川口氏は、夕顔の死は、霍小玉死後、李益の妻に祟る条を連

想させ、御息所の死霊が出現して夕顔を頓死させたと指摘されたが[1]、田中隆昭氏は夕顔の巻に出没した「いとをかしげなる女が何者かは遂にわからない」、「霍小玉伝」に出没した美男子と同じく疑心暗鬼による[3]ことだ」と述べた。「霍小玉伝」に出没した美男子の姿は、小玉の死霊の祟りだと考えられるが、夕顔巻に出没した「いとをかしげなる女の姿が健在している六条御息所の死霊だとは考えられがたい。

2　美女鬼の再現　小玉の死後、「生為レ之縞素、旦夕哭泣甚哀」、李益は小玉の為に喪服を着て、声を上げて泣き、非常に悲しむ。そのためか、「将葬之夕、生忽見二玉繐帷之中一。容貌妍麗、宛若二平生一」、埋葬の前夜、李益は、突然霊前の帷の中に、生前と変わりがないように坐っている小玉を見つけた。小玉は、李益の方を顧みて「見送って下さってあの世からありがたくお礼申しあげます。お情けのまだ残っているのを見て感慨無量です」（愧二君相送、尚有二余情一、幽冥之中、能不二感嘆一）と言い終わると姿が消えた。一方源氏の君は、夕顔の死に対して甚だしく悲しみ、四十九日法事が行われた翌晩「せめて夢にでも会えば」と思いながらまどろみ、「ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ」と美しい女の姿が再び現れた。

両者とも男の主人公が女の死に対して悲痛極まる時に、美女鬼の姿が再び現れた。李益の悲しみの状態を見て、恋人だった小玉が姿を現し、感慨無量に最後の別れをしたのに対して、源氏の前に、惚れ込んだ夕顔の姿が現れるはずなのに、「かのありし院ながら、添ひたりし女」の姿が現れた。これは実に不可思議なことであって、構想上の破綻ではなかろうかと疑われる。でも、作者は、源氏がその場面を見て、美女鬼が自分に魅入っているついでに、夕顔に死をもたらしたと推測し、また物の怪が出没するまえ、作者は源氏の素晴らしさ、美しさを語り、また「誰も誰もちらと見るだけで関心を持たないものはなく、そのそばに仕えたくない者はいない」という語りを見たら、それは源氏の推測した理由の布石ではなかろうかと連想させられ、夕顔物語と「霍小玉伝」の創意の違いが伺える。

3　両作品にある鬼が数回出没する類似　小玉の死後間もなく、李益は結婚し、新妻を連れて鄭県に戻った。その夜、鬼の祟りが起った。

生方与二盧氏一寝、忽帳外叱々作レ声。生驚視レ之、則見二一男子一、年可二二十余一、姿状温美、藏レ身暎レ帳、連招二盧氏一。生惶遽走起、繞レ帳数匝、倏忽不見。

この鬼の祟る場面を夕顔巻の怪異性の表現と比べてみると

①物の怪がみな夜という時刻に起った。李益が妻の盧氏と寝ようとする夜に物の怪が起こり、夕顔の巻では「宵過ぐるほど、少し寝入り給へる」時刻に発生した。

②「倏忽不見」と「ふと消え失せぬ」という特徴の類似である。李益は、真夜中現れた美男子の姿を見付けて、後を追いかけ、その美男子は幔を数回廻って「倏忽不見」（すうと消えた）。夕顔の巻では、従者が紙燭を持って来て照らして見ると「ただこの枕上に夢見えつる容貌したる女、面影に見えて」、また「ふと消え失せぬ」、と消えてしまった。

③「忽帳外叱々作声」（突然、帳の外ミシリミシリという音がする）と「足音ひしひしと踏みならしつつ」の類似表現である。「霍小玉伝」では、先ず「忽帳外叱々作声」突然、帳の外ミシリミシリと音がして、それから祟り始めたが、夕顔の巻では、夜明け前「火はほのかにまたたきて、母屋の際に立てる屏風の上、ここかしこの隈々しくおぼえたまふに、物の、足音ひしひしと踏みならしつつ、後より寄り来るここちす」という描写である。

以上の考察を通して、「霍小玉伝」と夕顔の怪異性表現の類似が十分伺えよう。大きな食い違いは物の怪が起った時、男の警戒ぶりと鬼の姿であるが、李益は物の怪を見て「惶遽走起、繞ㇾ幔数匝」（急遽起き走り、幔を数回廻った）のに対して、源氏は「太刀を引き抜きて、うち置きたまひて、右近を起こしたまふ」。舞台が違うだけに、男が怪異に対する警戒ぶり、動作は違うはずであろう。そのほか、鬼の姿であるが、李益を嫉妬させるために小玉の死霊は、美男子に化けて頻りに祟ったが、夕顔巻では、源氏に魅入った鬼は、美しい女の姿で祟らなければ不自然であろう。

新間一美氏の論証によって、夕顔は、「任氏伝」の影響を受けた従順な女として描かれ、その結果、死に至る、[6]というが、稿者はその死に至らしめる怪異性の表現は、「霍小玉伝」を踏まえたところであると考えている。夕顔物語は、同時に二篇の唐代の伝奇小説から、必要な内容を取り入れて、作り上げた新しい物語であると考えられよう。

三　末摘花と霍小玉の一途な性格

末摘花物語は、一見普通の人間男女の恋愛物語であって、夕顔の巻とまったく異質なものである。末摘花物語と「霍小玉伝」との関係を言えば、①先ず人物設定及び②女性の一途な性格の類似、さらに③冷淡にされても女性がやはり一途に男を信

じ、待ち続けることを主題として物語を展開した――と考えれる。末摘花の巻は

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしここちを、年月経れど、おぼし忘れず、ここもかしこも、うちとけぬ限りの、けしきばみ心深きかたの御いどましさに、け近くうちとけたりしあはれに似るものなう、恋しく思えたまふ。

という巻頭文で始まり、この巻頭文にある「夕顔の露」というキーワードによって、若紫の巻とはさほど関連なく「夕顔の巻につづけてかける也」[7]と思われる。

この巻頭文にひき続き、物語の展開に必要な人物が登場して来る。先ず男君は、何とかして、仰々しい身分ではなく、ただ可愛い、人柄の気兼ねしないですむような女を見付けたいと思っているが、その気持ちに従わず「けしきばみ心深きかたの御いどましさ」に振舞う女ばかりであった。

この構文は、実に李益の「思レ得二佳偶一、博求二名妓一、久而未レ諧」という気持ちの描写によく似ている。李益は少年得意、年若く進士試験に及第し、美人を得たいが、気に入るような女性はなかなか見つからない。そのためさらに謝礼を多く出し、もっと上手な周旋者に頼む。

李益が頼んだ周旋者は、元々内親王家にある芝居の女優、美しい鉤氏である。鉤氏は「性便辟、巧二言語一、豪家戚里、無レ不経過二」、活発で口達者、豪族によく通っている。源氏の君が頼んだ人は「内裏にさぶらう、わかむどほりの兵部の大輔なる女なりけり。いと色好める若人にてありける」女房である。実によく似ている二人である。

それから数か月立って、鉤氏はついに李益に故霍親王にたいそう可愛がられた娘（故霍王小女、字小玉、王甚愛レ之）、小玉を紹介したが、大輔の命婦は「故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女」を紹介したのである。考察したところによると、末摘花の巻の登場人物、源氏、周旋者、女性の人物設定は、何れも「霍小玉伝」に相応していると考えられる。でも霍小玉は珍しい美人なのに、「源氏物語」の作者は、末摘花を、思いがけなく不器用な醜女に設定した。これは両作品の大きな分かれ目にもなっている。

李益が小玉との連絡を断ち切って行方をくらましたのは、母親の意に従って名門の姫様と婚約をしたためなのに、源氏が末摘花を疎遠する理由は、不釣り合いな家柄ではなく、その印象的な醜貌ではなかろうかと考えられる。

小玉は、始めから不釣りあいな結婚を望まなかったものの、李益が再三末長く付き合って、いつになっても心が変らないと

誓ったので、小玉の信頼を得たのである。一旦李益を信じると、小玉は心を変えず一途に待ち続けて、行方をくらましてからも方々へ人を使って消息を尋ね廻る。そのため金を使い果し、仕方なく時々そっと侍女に言い付けて、装身道具、飾りもの、金・銀・宝石などを売らせ、ついに破産してしまい、父親の形見、簪さえ売ろうとした。

一方の末摘花は、父親に死なれて、生活の保証がなくなったこともあろうが、源氏の来訪が途絶えたため、さらに苦しくなる。末摘花が源氏を待ち続ける間、生活は困窮に極まった。紫式部も末摘花の貧困な生活ぶりをポイントにして語った。そのような堪えがたい苦しい生活をしても、疑いもせずに一途に源氏を信じ、荒廃した旧邸を守って待ち続ける末摘花の心は、みんなの同情を募り、感心させた。源氏は帰京した翌年、花散里を訪れる途次訪問し、ここに末摘花の長年の願いは報いられた。二年後、源氏の二条東院に迎え取られ、霍小玉の不幸な死とは相対照して、幸せな人生であった。

四　六条御息所と霍小玉死後の祟り

六条御息所物語と「霍小玉伝」は、名門出身の才子と高い教養を持ち、音楽、詩歌に通じた奥床しい佳人を設定して、ごく有りふれた男女の恋物語のように見えるが、しかし二人の女性が男に棄てられ、その恨みを晴らそうとして、死んでからも祟って復讐する創意は一致してめずらしい。

1　両作品構成の一致と構想の差異　霍小玉は、青年詩人李益と巡り合って、二年間も睦まじく一緒に暮らした。官僚試験に及第した李益は「末長く付き合って心が変らぬ」と小玉に再三誓ったにも関わらず、帰郷してから母親の言う通りに、名門の姫君と婚約をして、小玉に会おうとしなかった。それに対して風流な人物は何れも小玉の純情に感動し、侠気のある連中は、皆李益の薄情に怒った。黄衫の義士に援けられて、小玉は李益と再会出来たが、忿懣のあまり「我死之後、必為二勵鬼一、使二君妻妾終日不レ安」（私が死んでからも悪鬼になり、君の妻、妾を祟って始終安定させない）と言って気絶した。

この小玉の生前の恨みに対して、葵の巻で正式に登場した六条御息所は、車争いにより、源氏の本妻の女君に見下されたと思い込み、斎宮の姫に付き添って野の宮に行こうとしても、源氏が留めてくれないことなどに心が煩って、生魂が遊離してしまった。遊離した魂は、左大臣家へ行って葵の上に憑き、お産の弱り目に乗りこみ、苦しめ、死に至らしめた。それから御息

所は、娘の斎宮に付き添って野の宮から伊勢にまで下った。帰京してから病いに犯された御息所は、娘のことを源氏に頼んで他界した。葵巻を中心にする六条御息所の生前の物語は、霍小玉生前の多情多恨と違って、多情よりも多恨であって、祟って復讐する物語である。

小玉は死ぬにさきだって「我死之後、必為二厲鬼一、使二君妻妾終日不レ安」という恨み言を言ったが、死んでからも言った通り、①李益の正妻、②暫らく枕を共にした侍女、③そして李益の身請けした最愛する営十一娘――に次々と祟った。そのため李益は妻を三度取り替えても、円満な結婚生活が得られなかった。六条御息所も死んでからその死霊が再び現れてきて、紫の上・女三の宮につきまとって祟った。結局、紫の上は死に、女三の宮は出家した、それは源氏に多大な打撃を与え、淋しい人生の幕を閉じさせた。

以上の考察を通して、両作品とも女性の生前・死後にわたった構成になる点が一致していると考えられが、霍小玉はただ死んでから祟って復讐したのに対して、六条御息所は生前・死後「源氏の室たる人にどこまでもたたる」[8]、そこに物語の構想が違う。

2　六条御息所物語独創上の破綻　作者は、再三、六条御息所生前物語に重要な存在である葵の巻が生魂の遊離をベースにした物語である――と暗示しながら、遊離した生魂が葵の上に憑き、自らの力によって取り殺したことを語った。

魂は生死を超えて永遠不滅なものだという観念は、大昔から漢民族の民族心理に培われ、文学作品にも満ちている。唐代の有名な「離魂記」は、女性が願いに適わぬ結婚に反抗して、魂が遊離して好きな人と駆け落ちをした話であるが、六条御息所の魂が遊離して、葵の上に憑依したのである。日本にも中国にも、昔から憑きものの正体のすべてが生霊ではなく、死霊であって、冤罪や被害者の怨霊である。[9] 少なくとも「源氏物語」の成立した時代までに生霊が憑依する前例を見い出すことはできない。だから生魂自らの力で人を取り殺すことは、空前絶後の話であって、紫式部の独創である。独創と言えども、成功した独創ではなく、あまりに不自然な構想であって、結局その前例のない生魂の祟りを描写するとき、慣例の死霊の憑依・悪鬼の仕業を取り入れて表現したのである。のち紫式部自身が六条御息所死後の祟りを語る時、生魂や死霊が同じように祟ると証明している。六条御息所の死後、死霊が再び現れて来て紫の上に憑き、苦しめる。ひどく祈り伏せられたとき「人は皆去りぬ。院一所のお耳に聞こえむ」と願い、さらに「髪を振りかけて泣

くけはひ、ただ昔見たまひしもののけのさまと見えたり」。それは、葵の上に取り憑いて源氏に話しかけた六条御息所の生魂とそぶりが全く同じように見えたのである。源氏はこんなことがこの世にあろうか、恐ろしいことだ、と心にしみて思い、昔の一件とそっくり同じなのも、これからのことが気掛かりに思えてきたのである。

御息所の生魂に取り憑かれて、葵の上は亡くなったが、同じ御息所の死霊が、紫の上に取り憑いているのが、源氏の心配するところである。この段を通して生魂・死霊の祟りは同じ表現の繰り返しだと説明し、さらに紫の上が憑依によって死に、女三の宮が出産の弱り目に祟られた構想は、葵の上が産後の弱り目に憑かれて、死んでしまった構想を二人に分けて語ったとも考えられる。

もう一つ筋の通らない構想、ナンセンスなところは、と考えるが、「霍小玉伝」では、小玉が死ぬ前「我死之後、必為二勗鬼一、使二君妻妾終日不レ安」と言い、そして復讐したが、紫式部は、六条御息所の執念深いことを強調するためか、「霍小玉伝」を上回って、死後ばかりか生前も祟って、源氏の室たる人にどこまでも祟ったと語ったのである。しかし不可思議なのは、六条御息所が死ぬ前娘のことをあれほど恨んでいる男に頼んだ。一旦頼んで娘の世話をしてくれたら、あの世にいても人に感謝すべきであろうが、死霊は一切構わず、再び現れて来て付きまとって頻りに祟った。作者は、六条御息所の娘の後日談のために布石したかったのか、後人が手入れしたのかそれとも時間を隔てたのか分かりにくいが、筋の通らない話であって、構想上の破綻だと言わなければならない。

六条御息所物語は、すぐれた人物の心理描写、新奇な創意において印象的と言えようが、構想上の繰り返し、話筋の不合理なところが傷である。

五　認知されなかった浮舟と霍小玉

浮舟物語は夕顔・六条御息所物語と同じ怪異の名篇である。池田亀鑑博士は手習の巻に関して

作者は種々なる点において夕顔と対照させながら構想したものと思われる。少なくとも、夕顔の巻と浮舟の巻及び手習の巻との性格の類似は、作者の幻想の中にある一つの類型を示したものとみとめることができる。[10]

と指摘された。稿者は池田博士の洞察力に感銘を受け、二篇ともに同じ「霍小玉伝」の影響を受けたその内在的な関連をもっ

て、氏の論説を証明してみたい。

夕顔の巻の主幹になる怪異性の表現は、小玉死後の祟りとの類似が伺えるが、手習の巻の怪異性の表現は、さらに霍小玉死後の祟りに酷似している。

「霍小玉伝」に、小玉の死後間もないころ、李益は新妻の盧氏を連れて鄭県へ帰った。ある晩、二人が寝ているとき「見二一男子一、年可二二十余一、姿状温美、蔵レ身映レ帷、連招二盧氏一」（二十歳前後美しい姿のおとなしげな若者が、身を隠し、帷に影を映しながら、頻りに盧氏に手招きする）場面がある。この二十余り、容姿温美な男子が頻りに手招きをして盧氏を呼ぶ場面は、手習の巻の浮舟は、極度の精神困憊によってこの世を逃れようと決心したところへ「いときよげなる男の寄り来て」、浮舟に向かって「いざたまへ、おのがもとへ」と呼んでいた場面を連想させられる。

さらに浮舟及びその両親の人物設定も「霍小玉伝」の人物設定に相応している。そこに作者の幻想の中にある一つの原型なる「霍小玉伝」の存在を示したものと認めることが考えられよう。

①霍小玉の父親、霍王は唐高祖の息子であって実在の人物であるが、浮舟の父親は「そのころ、世にかずまへられたまはぬ古宮」、桐壺天皇の息子であって、それに相応して設定した虚構の人物であろう。

②小玉の母親は浄持という、霍王にたいそう寵愛された媵元であるのに対して浮舟の母親は「中将の君とてさぶらひける上﨟」である。

③小玉は霍王に可愛がられたが、父親に死なれて「諸兄弟以二其出レ自賤庶一、不二甚収録一、因分二与資財一、遣レ居二於外一、易レ姓為二鄭氏一、人亦不レ知二其王女一」、諸兄弟は彼女の母親の出身が卑しいので、認知せずに財産を分けて余所に住まさせた。小玉親子は名字を変え、他人も王女のことを知らなかった。小玉の故親王に可愛がられた点は末摘花と類以しているが、認知されないため、運命に翻弄された点も浮舟と似ている。

李益は「日頃の誓いは一生変わりませぬ」と言いながら、一旦小玉と別れると、厳格な母親の言う通りに、名門の盧氏と婚約を結び、小玉との連絡も途絶えた。身分制度の強い唐代社会では、名門の才子が娼妓を娶ることは普通ではない。小玉が李益に棄てられた主な理由はやはり身分の不釣り合いなことだと考えられる。

浮舟は、幼少のころ、侍女の母親について、再婚先の常陸介の家に行き、他人は親王の姫様と知らなかった。年ごろになる

と、財力を持つ常陸介に近付く左近少将は浮舟との縁談を決めたが、一旦、浮舟が実子でないことを知ると約束を破り、破廉恥に浮舟の妹に乗り替えた。この破談は、浮舟を直ちに死に追い込まなかったが、その事件をきっかけに、浮舟の運命を変えた。両者の経緯はやや違うが、左近少将が浮舟との婚約を翻した理由はやはり財産・身分によるであろう。

浮舟物語と「霍小玉伝」との類似があると伺え、「霍小玉伝」という作品の影響を受けた浮舟物語と夕顔物語との類似も、偶然ではなく必然的なものがあろう。

六　結び

以上、夕顔・末摘花・六条御息所・浮舟、この四人にまつわる物語と「霍小玉伝」との関係の考察を通して、相互の間に、内的密接な関連がある理由を解明したと考える。源氏の物語には、夕顔のような、同時に「任氏伝」と「霍小玉伝」二篇の作品の影響を受けるケースが少なくないが、四つの物語が同時に一篇の小説から影響を受けて構想するのはまれなことである。

紫式部は、「霍小玉伝」という人物の性格の違う側面、展開筋の違う段階をポイントにして誇張し、自作品のなかに個性のある新たな人物・物語を作り上げたと考えられる。故親王に可愛がられた、困窮極まる生活に堪えて男を待ち続ける霍小玉の純情は、末摘花物語に利用されており、故親王の娘であるのに、兄弟に認知されなかった女性の不幸は、浮舟物語に利用されている。小玉が死んでからも、徹底的に復讐するという新奇な創意においては、六条御息所物語と一致するが、死後にも祟る場面は夕顔・浮舟物語に十分利用されている。夕顔・末摘花・六条御息所・浮舟物語が、それぞれ「霍小玉」の影響を受けており、「源氏物語」の中に生まれ変わって、斬新な容姿をまとって平安舞台で活躍している。

しかし同一作品から影響を受けて作り上げた人物及び新作品は如何に変容変形・変質を経ても、作者の脳裏にある原型の影響が時々表面に出て来て、その繋がりを示す。霍王に寵愛された小玉の姿が投影した末摘花は、浮舟との間に類似関係はなさそうに見えるが、末摘花の父親なる常陸親王と浮舟の継父なる常陸介が同じ名字を使っているので、同一原型からの発想を表明していると考えられる。

同一作品からの影響を受けて作り上げられた巻々の物語を考察して、その内的繋がりを究明したことによって、『源氏物語』の生成・構想を解明するのにいささか役立ち得たものを考える。

「付記」　源氏物語本文の引用は新潮日本古典集成『源氏物語』により、唐代小説の原文は『太平廣記』（人民文学出版社刊一九五九年・北京）、『唐人小説』（汪辟强校録　上海古籍出版社一九七八年版）による。訓点及び日本語訳は『唐代伝奇』・新釈洪文大系44参照。

注1　川口久雄「源氏物語の素材における中国伝奇小説その他の投影」「平安時代文学史の研究」所収、明治書院、一九八八年一二月以下川口氏の諸説は同書による。

2　中西進「源氏物語の比較文学研究」「近代の享受と海外との交流」源氏物語講座9所収、勉誠社、平成四年。

3　池田亀鑑「物語文学Ⅰ」・「14　夕顔物語」至文堂、昭四三年四月。

4　知切光歳「鬼の研究」大陸書房、昭和五三年八月。

5　田中隆昭「源氏物語における歴史と虚構」「源氏物語　歴史と虚構」所収、勉誠社、平成五年六月。

6　新間一美「もう一人の夕顔」―帝木三帖と任氏の物語―」「源氏物語の人物と構想」所収、笠間書院、昭和五七年五月。

7　「河海抄」「花鳥余情」による。

8　注3参照、なお「24　六条御息所物語」による。

9　藤本義勝「源氏物語の〈物の怪〉―文学と記録の狭間」笠間書院、一九九四年六月。

10　注3参照。なお「31　浮舟物語」による。

（一九九五年一〇月一三日）